

2017年(平成29年)6月4日(日曜日)

日本農業新聞

3種郵便物認可

農的デザイン研究所代表

蔦谷栄一

## 共生主義宣言

西川潤、マルク・アンベール・編



フランスの学識者・市民運動家によって2013年に「共生主義宣言」が出版され、これを受けてさまざまな活動が広がっているようだ。「共生主義」とあえて主義(ism)とすることによって、「共生」をキーワードに、現代資本主義システムの危機の体系的な説明と、そこから出口を見いだすための実践理論を目指す。

「共生主義宣言」は、脱成長を図り「共に豊かに生きるもう一つの道」を模索し実現していくためには、

「現代社会科学が忘れてきた文化や倫理の問題を復権」させるとともに、地域コミュニティや市民運動の実践が欠かせないということに凝縮されるのではない。

本書はその全訳を掲げたもので、加えてその解説、共生主義の経済と社会の大要など、フランスと日本における共生社会を目指す実践が紹介されている。

- ◇出版＝コモنز
- ◇価格＝1800円
- ◇副題＝経済成長なき時代をどう生きるか
- ◇にしかわ・じゅん 早稲田大学名誉教授
- ◇まると・あんべーる フランス・レンヌ第1大学政治経済学教授

## 「農の営み」から今を見直す

フランス・レンヌ市での産消提携運動による「ひろこのパニエ」、滋賀県の菜の花プロジェクト、山形県高島町の「たかはた共生プロジェクト」などの事例は、いずれも自然と触れ合う1次産業の営みを基本にしたものであり、農業の果たすべき役割の重要性やポテンシャルがおのずと浮かび上がる。また、その核心をえぐるように第5章では「半農半読」の勝俣誠が「現代世界における『農の営み』の根拠」なる一文を寄せしており、「『農の営み』が持つ自由の意味」や「『農の営み』を支える技術の豊かさ」についての記事は興味深い。

「共生主義宣言」には、ヴァン・イリイチの思想が大きな影響を与えているが、解説や事例では一榮照雄がたびたび登場する。一榮思想の再評価が進行していることをうかがわせる。目指すべき自己改革の原点は何かをも、考えさせる。